報告文作成用フォーマット

第１分科会

第５分散会

Ⅰ　はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに提案された。初めに、協力者から次のように呼びかけられた。「すべての教育活動の中で、子どものくらしを丁寧に見つめ、家庭の状況や地域の課題をつかみ、家庭・地域・関係機関を結ぶ取り組みの重要性を確かめてきた。子どもたちが大切にされ、安心して育ち、豊かな感性や自己表現力を育み、なかまとともに生きる集団づくりの実践を進めることが大切だ」「部落差別を解消するための学習を、現代社会のさまざまな人権問題を解決するための学習に広げてきた。」「どのような人権問題があり、誰の人権が侵害されているか具体的に学び、知識や技能を身につけ、不安や生きづらさを知る中で、思いを想像する力をつけ、自身の中にある当事者を忌避する意識に気づいたり、差別を助長・誘発する情報を見抜く力をつけたりすることも重要だ。」

この後、大会冊子 p60～61 の討議の柱が確認され、報告・討論に入った。

Ⅱ　報告及び質疑討論の概要

－報告1－㉓

「自立に向かう子どもの姿を求めて

～エピソード記録の交流を通して～」（兵庫県人教）

－主な質疑と意見－

年間・長期・短期の指導計画以外に、「エピソード記録交流」を通して、最大の保育環境である保育者の資質（子どもにかける言葉等）の向上を図ろうとしているということ、忙しい勤務の中でも年度当初のグランドデザインから共通理解していることなどが報告された。

・**協力者（広島）や兵庫や熊本**から質問や意見が続いた。「エピソード記録」は子どもの姿を大切にしようと始められ、地域との交流からの学びにまでは広がっていないことが明らかにされた。

・**兵庫**からエピソード記録については保育者の予想・感想ではなく、事実が記述されており、わかりやすかったが、幼稚園と保育園との接続について質疑があり、担任等は連続して子どもをみていること、研修時間も今年度は午睡時間を活用して事前にメモ書き渡して後で集めるといった方法をとって記録の交流を図っていることが説明に加えられた。

・**兵庫**からも質疑があり、園小連携については、職員交流を実際の子どもの姿（園も小学校も）を中心に、家庭での姿なども含めて合同研修を年 2 回行っていることなども、園長を中心に補足説明がなされた。

・**愛媛**からの質疑でエピソード記録の具体的な紹介や『人生の詩』より「本物と偽物」の詩（東井義雄）の朗読などもなされた。

－報告２－㉑

「ひとつひとつの思いに心を寄せて」

（高知県人教）

－主な質疑と意見－

保育士になって四年目の報告者が、昨年度までの取組について報告された。気持ちが不安定なAさん（4歳時）を中心に、「心を満たす環境づくり」を通して、Aさん自身や保護者、Aさんの周りの子どもの関わりによって、それぞれが少しずつ変容してきたことの報告であった。

・**兵庫**からは自分の意思をはっきり表すことができる A さんについて質疑が出たが、A さんの意思を集団生活の中でどう尊重していけるのかを念頭に置いて取り組んだことが報告された。

・**奈良・兵庫**からは辛いときの乗り越え方や支えてくれた人など職員集団しての取組、職員集団の中にどう返していったかでの質疑があったが、隣保館併設の保育園で、様々な背景を持つ子どもたちと職員集団の中で、自分にできない悔しさが自分の変容の契機となった（「しない」を受けとめること、ボーリング遊びの工夫、保護者との会話で前置きを置いたことなど）。両隣のクラスの保育士や加配保育士・園長など、職員集団の子どもたちとの関りからも学び、職員会議でも共有していった。保育者自身もAさんの周りの子どもたちも、保護者も「変化」していったが、それはまさに「成長」していったのだとの意見が兵庫からあった。安心安全なチーム体制づくりについては園長から補足説明があり、A さんは比較的危険な行動はないこと、他の子については療育手帳の種類によって加配保育士がついていることが補足された。

若い保育者自身が、子どもの姿を一つにまとめないでいろんな子どもの見方を学んだことが成長につながった報告だった。

・**香川**からは変容の具体的な姿について質疑があり、身近な職員からは、報告者の悔しい思い、学び、変容等の補足があった。

・**福岡**からは集団生活のなかで、したいことへの時間の保障と、しないことへの保障についてなど、取

組の難しさについての質疑が出され、人と人としての対応に努めたことなどが報告された。

－報告３－⑳

「違和を感じる」…そこからの始まり」

（福岡県人教）

－主な質疑と意見－

ある中学二年生の「出生時にわりあてられた性に違和を感じる」という作文を契機に、5年間の授業実践や横（地域・行政・企業）や縦（保幼の入り口から中３の出口）へと研修を広げ、町内すべての保育園・幼稚園・小学校・中学校の授業から、性の多様性をよりよく理解するための実践事例集を完成させていった経緯を、5 年生の実践や、学校と行政との連携、保護者・町民への啓発などとともに報告された。

・**香川**からの質疑で、報告者からは、性のとらえ方があいまいな保育園・幼稚園では『多様性を認め合う』という素地を作っていくことを入り口に、小学校では色や遊びなどのジェンダー感を考えさせていくことから、心の性・身体の性・好きになる性など、中学3年では『社会全体のパートナーシップ宣誓制度』を出口にしていることが出された。また、ハード面では本人がどうしたいかを大切にしていることが分かった。

・**奈良**からは、当事者と非当事者と分けるのではなく、全体の問題だととらえて進めていくことが大切だという意見が出され、報告者からは LGBTQ の学習ではなく、性の多様性を～としたこと、自分も含めて一人一人の問題だという認識と、本人が何を苦しんでいるかなどを考えさせることで上滑りでなく、命に係わる深い問題なんだという認識をされる学習を意図していることなどが出された。
自治会等に対する啓発についても各種学習会を実施し、否定的な意見は出ていないことが出された。

・**神奈川・奈良**から各学校と行政の連携についてのきっかけ・要因などの質疑が出たが、行政が集会などの集まりごとに連携を意識させることや、5年で300本の授業の振り返りを交流してきたことが、完成につながった。これは、完成させることを目的に行ったのではなく、『私たちは差別をなくす主体である』ことを念頭に、周りの子どもたちの意識を変えていくことを繰り返しチェックしてきた成果である。分断するのでなく、『すべての子のために』ということも、常に意識しておく必要があるという意見が神奈川から出た。

・**福岡**からは、いろいろな人権課題について、差別をなくすためのいろいろな取組を見てきた。人権・同和教育は答えがないが、一生懸命に取り組みすぎて『若い先生方の心がパンパンになっている』ことを問題視され、若い先生方自身の居場所がなくなっていないか、先輩や経験者が留意することが大事で、そうすることで全ての子どもたちの笑顔と命を守ることにつながっていくという意見が新宮町へのエールとして出された。

「一日目のまとめ」

一本目二本目は園からの報告、三本目が小学校の報告であった。すべての子どもの発達保障、保護者に対する支援の充実、人権保障などについて、どの報告も実践されており、一本目は「エピソード記録」の手法を通して、二本目では、しんどいことを中心として関わってきた人権・同和教育の取組、三本目は町全体で研修をしていく日本の中でも町独自の取組について報告された。どの報告も報告者および報告に関わった方々の成長を感じた。しんどいことから逃げるのではなく、どうしたら解決できるのか、誰とつながれるのかと悩み、おとなの集団づくり・子どもの集団づくりを進めていった。園・学校全体が一つになり、一人を支えようとする集団になったことや、町全体がチームとなったことがあったからだと感じた。そこに教師の変わり目があるのだと思う。それにより、子どもたちが良い方向に変わっていく。LGBTQ については明日の大阪の報告に関わってくる。明日もぜひ参加してほしい、と結んだ。

－報告４－㉒

「思いをつなぎ　広げるために」　（香川県人教）

－主な質疑と意見－

地区児童・医療的ケア児・外国にルーツのある児童などが在籍し、一人一人の課題が多様化してきており、学年を超えた連携が必要とされるという教職員集団の課題が見えてきた。医療的ケア児のゆみさんの交流学級担任が、「ゆみさんに昼休みを」と動き出した事例と、学力・進路支援担当教員が部落問題学習を進めるために地域の方たちとの関わりや現地研修等を通して、部落問題に対する教職員の意識を変えようとしている報告をされた。
報告者に対する応援で来られた同校教職員の方、地元行政の方、地元地域の方のつながった発言が多くあり、『気軽に発言できることの大切さ』『悩みを聞いた先輩からの支援』『地域で模擬授業を行った際の地域の方々の受け止め方』が、それぞれにとても熱く、そのことが教職員のつながりをはじめ、行政、地域の支援の高まりの重要性を述べられた。
カフェという言葉について質疑があったが、心と心を結びつける場という意味で使ったとの補足があった。

・**奈良**から普段のつなぐ取組についての質疑があり、具体例も報告者から紹介され、まわりの子の成長もみられた事例の紹介もなされた。

－報告５－㉔

「変わり者のいる学級　～1年間で見えてきた
一人ひとりの“いろ”～」（大阪市人教）

－主な質疑と意見－

最初、コケ芸を披露され笑いを取られた後、6年生担任の報告者（自身が在日韓国人）が、中国人の

チェン、自分の性に違和感を覚えているヒナタ、自己肯定感の低いサトシ、広汎性発達障がいの診断を受けているミクなどに寄り添いながら学級づくりを行い、そこから見えてきたこと「LGBTQ＋の考え方」「自分を生きること」「一人ひとりの自己表現・自分のやり方を認める」「アセスメントシート（自己満足度）の取組」「そばにいるよと言える人」「変わり者とは何か」などの取組と、それらによって、学級全体をつなぎ、枠にとらわれずに「自分らしく生きよう」と自分を表現できるようなった子どもたちの姿について報告された。

・**奈良**からは、まさに報告者と同じように「担任が一番の変わり者」で取り組んでいる、トランスジェンダーとして活動実践を行っている高校から、性的マイノリティの生徒が人権作文に書いていくまでの取組などの実践が報告された。明日からの実践につなげていく力をもらった旨の意見をいただいた。

・**香川**から子どもたちが自己表現できるようにしていくための担任としての手立てや大事にしている言葉かけなどについての質疑があり、まず自分自身が変わりものであること、自分が失敗しまくる姿を見せていくということ、口が悪い子どもたちから、あほ、死ねといわれたら、「あほは、ありがとうほんまにって略してんのか」や「死ね!といわれたら、間髪入れずに、生きる!」「もう韓国帰れ!といわれたら、じゃあ物件探しについてきてくれる？」という問答など、面白く返して、「ああショック」となるのではなく、通じない姿、へこたれない姿をみせることなど、子どもたちにも影響を与えていることが補足された。「この性同一性が!」と言われたときに、否定したら性同一性まで否定することになりかねないので、個別に聞いて、子どもの発言を何でと見つめたり、自分には効かないぞという姿を見せたりすることが子どもの姿を変えていけるのかなと考えていることが出された。

報告者の勤務校の校長からも、報告者が文章びっしりの学級だよりを一日も欠かさず発行していること、その中で子どもたちひとりひとりのがんばりや思いを紹介していることが、子どもたちががんばりや悩みの共有につながっているという土台の部分や、勤務している退職教員の中に、報告者の小学校時代の担任がいて、その担任に自分の作文をいつもほめてもらい、書くことが好きになった話などを補足紹介された。

・**奈良**から土台の部分・本音で語る部分についてのきっかけについて掘り下げた質疑があり、報告者自身の家庭状況（在日をオープンにしている）や友達にも韓国人であることを伝えていたことなどから自然であったこと、きっかけとしては物心がついたころのオリンピックの入場行進を見て、行進を教えられていたけれども、カメラを持ってパシャパシャ撮影している姿を見て、ふざけているのかと思いながらも、これが世界基準か、と思ったこと、自由でいいんだ、日本は集団の中に収めること、はみ出し者を差別しようとする、自由を認めたら個性が自覚されるようになること、それが当たり前のスタイルになること、これかと思った。変わり者といわれているが、変わり者が世の中を変えていくこと、自由をどうやって学級の中で作れるのか考えたら、宿題をなくして自主学習にしたり自分のやりたい学習をしたりすること、直接は言いにくいことを言えるような日記をつくろう、学級通信でほめる場所をつくろうとか、これまで出会ってきた先生方の姿を見て見つけたことだった。

それぞれの個性を生かしながら、学級としてまとめていく難しさとその手立てについて質疑があったが、子どもたちが個性を出しはじめたら、苦手なところも見えてくるので、できないことも知っているから、このときには力を貸そうと、ぼろを出せるときにぼろが出せるから、まとまらないといけないときにまとまるんだろうなと思う。あとは、担任の思いをたくさん伝えること、こうやってくれたら嬉しい、こうやったら悲しくなるからいかんなど、あとはちびまる子ちゃんの戸川先生があこがれの先生で口調まで見習っている旨の応答があった。

・**香川**から報告に対する感謝の言葉と「そばにいるよ」に込められる大切な思いを述べられた。

・報告者からは最後になってしまいましたが、と前置きをされて、自分が日本名ではなく、韓国名の本名を名乗っていることの意味を語られた。 講師のときまで日本名を名乗っていた。兄も教員で、本名で通していたところ、子どもが転校したり、結婚差別を受けたりした。父親は反対したが、今まで自分があまり差別を受けてこなかったためと、変わり者であるため、本名を名乗ったら差別があるのかとワクワクした。9 年過ぎ、本名を名乗っても差別がなかった。それは、まわりの人たちの寄り添いがあったから、職場・子どもたち・保護者にも恵まれた。周りの支え、寄り添いがあったからここまで来れた。

「誰かを傷つけなければ、自分のやりたいことを選んだらよい」に同感したという意見。担任自身が「変わり者」（人と違うことをしている人、誰もしようとしないことに挑戦した人）であることを子どもたちに見せ、子どもたちとのやり取りの中で共有していくこと、「あほは、ありがとうほんまにの略」「死ね!（間髪入れず）生きる!」の問答」と面白く返すこと。迫られている場面では個別に「さっきは何で？」と話をする。宿題でなく自主学習、通信を通じて子どもの良いところを紹介し、発行している。本人自身が、周りの人たち、周りの子どもたちの寄り添いがあったからこそ、自分を表現できたのだとまとめられた。

Ⅲ 総括討論

まず、大会の三つ目の討議の柱について議論がなされた。

時間をとるのが難しい中、エピソード記録を続けているのは素晴らしい。続けていく中で保育者自身の変容はどのようなことところだったのか。（高知報告者）

保育者自身の成長の変わり目には、子どもが中心にあって、いわゆる「困った子」だと思っている子は、「困っている子」であり、課題の大きい子ほど、クラスや園の「宝」であり、この子はここまで育ったのだと職員の中でも話し合いながら、子どもから教えられ、自分自身も今後も変われるなあと感じた。（兵庫報告者）

・**奈良**から本名と通称名の話や子どもに個性を出してもらうときの手立てについても話が出された。「それいいね」を口癖にしてほめていること、英語科の特性かもしれないが、アメリカのように日常から小さなことをほめる積み重ねを行っていることなどが報告された。

・**兵庫**から取組によって地域が変わっていった事例がないか、具体例を教えてほしい旨の問いかけがあった。

・**報告者（福岡）**から、「継続していくためのキーマン、やはり人だと思う。めぐりあわせで、黙って聞いていてくれて、継続していくための、押しも必要、引きも必要、つなげていくための難しさを実感しているが、一つの部屋の中に解放子ども会・社会教育・そして性の多様性をよりよく理解するための話し合いをしている、そのつながり・空気感が大事だ」という旨の話が出された。続けて、**福岡**「差別はする側に問題がある」とあたり前のことを今さらながら書いてきたが、その授業をしていくことが本当に難しいのだということをわかってほしい。大阪の報告にもあったが、子どもたちが自分のことをいうのを勇気だと捉えないでほしい、私たちがめざしていたのは、いろんな事情を抱えている子どもたちが、自分のことをいえる環境、そのまわりの子の関わり、この空気感なら自分のことがいえるのかなという、それをつくっていきたいと思った。性の多様性についての授業をたくさん見て、その中でカミングアウトして変わっていく当事者の姿があるが、それを受け入れる・受け入れないという集団の何が違うのかということを考えさせる授業を国語（主人公の気持ちを追っていくと勇気になってしまう）でも道徳でもなく行い、つないでいくことはやはり難しい、という補足がなされた。当事者のがんばり、当事者の努力ということが前面に出てきてしまう。水平社の授業をしたときに、差別を受けないように当事者が努力したということに「当事者の努力だけでは差別はなくならない」という反論がすぐに出たことに、育てたかった姿を見た。

差別を受けている側の発信がないとそもそも周りは気づかないので、勇気も環境も、どちらも必要で、どちらも素晴らしい。全てが差別のない社会をつくっていくことにつながっていくのだと感じる。自分は特別支援学校で、今日生きていくのが精いっぱいな子どもを目の前に、どのように他者を受け入れるかという難しさを考えながら実践しているという意見もあった。

マイノリティ当事者の勇気のみに焦点を当てないで、自分のことがいえる「空気感」が大切である。しかし、差別されている側の発信があったからこそ環境が変わったということもあるので、二者択一でない方がよいとのまとめが協力者（奈良）からあった。

よい活動に感銘を受け、実践していく勇気をもらった、続けてほしいという旨の感想が香川や愛媛などから相次いだ。

・**香川**からは、いじめも差別もそれを許している環境・認めあきらめと閉まっている環境に原因があると思い、取組が紹介され、仲間づくりの大切さが力説された。

・**奈良**からLGBT理解増進法が成立して以降、法律を撤廃せよとのバックラッシュが堂々と出ており、性別変更についての法律と違憲判決以降、バッシングが増えていることを心配し、危惧している。子どもや生徒にはそのことまで伝えているという意見が出た。

「二日間のまとめ」

報告者から一言ずつ、報告し討論に参加しての感想を述べてもらった後、協力者（広島）からまとめを行った。

部落解放同盟中央本部の第 2 代中央執行委員長となる朝田善之助が 1956 年に主張した部落解放理論の「部落差別の三つの命題」についての紹介が行われ、三つ目の社会意識としての部落差別観念に関係した論議が主におこなわれたことや自分自身の被差別体験が語られた。